

室町期における貴族的武将の倫理

——伊勢貞親教訓書を中心に——

小 沢 富 夫

はじめに

日本倫理思想史における室町戦国期の思想を取扱う際、その研究の障害となるのは資料の不完全さの問題である。なかんづく家訓教訓類は、その性格上原本は今日ほとんど存在せず、僅かに残る写本を手掛りに研究する以外に方法はない。私はこの小論において、まず室町期の代表的な貴族的武将の教訓書である伊勢貞親の「為愚息教訓一札」を取上げその基礎的研究として写本群を調査した。これにより刊本「群書類従」(統雑部九十七、続巻第九四七 続第三十二輯下)、及び「日本教育文庫」(第一巻家訓篇)所収の同教訓書の校訂を試みた。第二に、室町期の倫理思想に關してはすでに多角的な研究がなされているが、私はこの教訓書を手掛りにしながら、室町期の武家故実の果した役割に注目し、將軍を中心とする政治的世界と故実的世界との関連のもとに貴族的武将の倫理思想を次の各章にわかつて考察してみたいと思う。

一、伊勢貞親教訓書の基礎的研究

〔1〕 書名、成立年代、作者について

〔2〕 写本の系統的考察

〔3〕 教訓書の内容

〔4〕 校訂の試み（別論）

二、室町時代における貴族的武将の倫理

〔1〕 儀礼尊重の精神と故実的世界の形成

〔2〕 教養ある武士

〔3〕 方便道德と徳治論

〔4〕 道義的人格の形成

一、伊勢貞親教訓書の基礎的研究

〔1〕 書名成立年代作者について

一般に伊勢氏家訓・伊勢守貞親教訓書などとよばれているこの書は、「もといましめのためなれば他人の一覽におよぶ事べからず」という家訓の性質上、その内題の「為愚息教訓一札」が原題と考えられる。

成立年代については、確かな資料がないため断定できないにせよ、写本のうち松岡本・学習院本（A系統）の奥書には、「千時長禄元年三月」と記されており、慈昭院殿義政公御代也という朱の傍書がある。これに対して、続群書類従本・内閣文庫本（B系統）では、それぞれ「千時長禄云比」・「千時長禄之比」となっている。尊経閣文庫本（C系統）もこれと同じく「千時長禄之比」とある。さらに、江戸時代の伊勢流故実家として著名な伊勢貞丈の「貞丈雜記」には、「此教訓書は東山殿の代長禄三年にしるしたる書也」^{〔1〕}とあって、長禄元年か長禄三年かを断定する資料に欠ける。いずれにしても、その時期を長禄年間（一四五七—一四五九）と推定することには誤りはあるまい。

作者については、本書巻末によつて貞親であることが明らかであるが、その成立時期を長祿年間と考えれば、貞親が四十一・三才、「愚息」の貞宗は十四・六才となる。したがつて、本文の内容と考え合せて、この教訓書は貞宗の元服の時期に授与されたものであらう。なお作者について尊經閣文庫本の奥書には、「貞親判」とある傍書に「親俊・是也」とあるのは後人の書入れと思われる。親俊とは蜷川新右衛門尉親俊（親世）であり、政所執事の伊勢氏被官で政所代を勤めた人物である。その子親長は、貞親の嫡子貞宗と交渉のあったことが「伊勢兵庫守貞宗記」の奥書から推測されるので、恐らく誤つて親俊と記したものであらう。

次に、貞親に視点を合せながら伊勢氏の系図を概括してみると、伊勢氏は桓武平氏の出身で平貞盛の孫正盛の子季衡をその始祖としている。そのうち伏見天皇の時代（二八七—二九八）俊継が豊後守伊勢守に任ぜられて以来、代々伊勢氏を称し、その孫貞継は足利尊氏の父貞氏の一字を許されるほどの知遇を受け、尊氏義詮義満の三代に任えた。その間幕府の政所執事、殿中惣奉行、御厩別当を勤め以後この職は伊勢氏の世襲となっている。伊勢氏がこの頃より幕府の殿中諸行事を掌り、その記録を伝承することによつて、今川、小笠原両氏とともに武家故実師範の家柄として重んぜられた事情は、義満の命による「三議一統大雙紙」の編纂に携わつたといわれるのをみれば明白である。⁽⁴⁾ 將軍義満が貞継の子貞信の邸で出生したと伝えられているごとく、故実の世界の確立にともないその指導的立場にある伊勢氏の果した役割は大きく、將軍家との親密なる関係もこうした時代傾向に相應して深く結ばれたのである。この関係を巧みに利用し、義政の寵臣して専権をふるつたのがこの教訓書の作者貞親である。

貞親（応永二十四（一四一七）年—文明五（一四七三）年）は、將軍義政の信愛を受け、兵庫介備中守伊勢守に任ぜられるとともに、伊勢氏の家職を継ぎ政所執事・殿中惣奉行・御厩別当の職にあつて、蔭涼軒季瓊と共に政務の実権を握つた。さらに日野富子に近侍することにより將軍家と諸大名との中間的存在者として利権を貪り、畠山・斯

波両氏の家督相継争いにおける内部干渉をはじめ、義政の将軍後嗣問題でもこれに介入している。こうした貞親の暗躍は、やがて起った応仁文明の大乱の因をなすものと言っても決して過言ではなからう。

応仁の乱前後の文献を通して、貞親が当時いかなる人物として評価されていたかを次に紹介することによって、さらにその姿を浮彫にしてみたいと思う。「文正記」では、

文正丙戌大乱ノ根源ハ甲斐常治。伊勢貞親。将ニ智勇好同心議定。追ニ退々義敏登用。義廉。今亦松王殿ノ之姑。貞親之妻就ニ姉妹。漸欲却ニシテ義廉。許ニ達セシテ義敏ヲ。肆都鄙ノ狼狽從ニ是起ル矣。

と斯波氏家督相続の問題における貞親の専権により都鄙の狼狽が起ったことを記している。また、幕府政治の最も重要な諸大名から提起された訴訟の裁決も管領に任せられず、寵臣貞親の手中に委ねられていたことについて「応仁記」では、

尊氏將軍ノ七代目ノ將軍義政公ノ天下ノ成敗ヲ有道ノ管領ニ不レ在。只御台所。或ハ香樹院。或ハ春日局ナド云。理非ヲモ不レ転。公事政道ヲモ不ニ知給。青女房比丘尼達。計上トシテ酒宴姪樂ノ紛レニ申沙汰セラレ。亦伊勢守貞親ヤ。鹿苑院ノ蔭涼軒ナンドト評定セラレケレバ。今迄最負ニ募テ論人ニ申興ベキ所領ヲモ。又耽ニ賄賂ニ訴人ニ理ヲ付。又奉行所ヨリ本主安堵ヲ給フレバ御台所ヨリ恩賞ニ被レ行。如此ノ錯乱セシ間。畠山ノ両家モ文安元年甲子ヨリ今年ニ至迄廿四年ノ間ニ。互ニ勘道ヲ蒙ル事三ケ度。赦面セラル事三ケ度ニ及ブ。何ノ不義ナル又何ノ忠モナシ。……是伊勢守色ヲ好ミ姪着シ最負セシ故也。

と記している。応仁の乱前年の京では、「何事も皆末の世になり平の伊勢物語せぬ人はなし」という落首がみられたのも当然のことであろう。文正元年（一四六七）、將軍義政が貞親の讒言によって義親を殺害せんとしたため、將軍後嗣問題は山名・細川両大名を中心とする二大勢力の対立を激化したが、そのため諸大名連判して貞親誅戮の

御教書を義政に願ひ、このため貞親は近江に一時逃れ隠れた。しかし、翌応仁元年（一四六七）には早くも京に帰り政務についた貞親の転身ぶりこそ、彼の教訓書を考察する際極めて有力なイメージを私に与えてくれるものなのである。「応仁略記」の作者すら

去にし方は。細川管領の披露とて。さしも城の外に出されし貞親今は出頭の雜掌と成て。再御陣に安堵せしむ。

兩年の内に転反し。昇没共に細川の水に随ひて。風情言語道断の天下かや。

とその利害打算による貞親の変身を記している。まして彼の妾にいたつては、

所詮彼貞親之妾者魔女也。匪直人。殷紂姐已。周幽褒姒亦天狗歟外道歟。禍首新妾。厲階讒臣。慾鼎眞者坐々来拘（イヌミヌ）石淪（シシム）困（ヘダシ）様也。

とあるように天狗であり魔女として描かれている。

さて、こうした姦臣貞親を父とする貞宗（文安元（一四四四）年—永正六（一五〇九）年）とはいかなる人物であつたであらうか。先の斯波氏家督相続の抗争の際、父に対して

義敏身上ノ事専ラ御取持之事不可然存候。一大事可出来。然バ終ニ天下ノ騒動ト存候。

と諫言したため父貞親より勘当された。この貞宗の態度について

良楽苦レ口。且ハ清盛ヲ重盛教訓セラレシヲ承引ナク。叡心ニ背キ家ヲ亡サレシナリ。貞宗モ君ノ為家ノ為。カク被レ申ケルト。後コソ人ハ沙汰シケル。（十）

と称歎された。そのご父貞親の追放により家督を継ぎ、兵庫助・備中守・伊勢守に任ぜられ、殿中惣奉行御厨別当として応仁の乱の際、幼少義尚をよく扶佐したと言われている。

貞宗以後の伊勢氏は貞孝の代に至り、永禄五年（一五六二）三好党と戦ひ丹波杉坂で一族討死によりその家も衰

えたが、徳川家光の時貞衡が召され再び武家故実の家となり幕府に任え、以後その家学伊勢流の礼法は伝えられ、貞丈によって集大成されている。

〔2〕写本の系統的考察

「為愚息教訓一札」の原本は今日不明であるが、写本群を調査した結果、大別して次の四系統に分類できるのではないかと思う。

A系統の写本

(イ) 宮内庁書陵部所蔵「松岡本」

この写本は、「貞親教訓書」の表題をもち、巻末には「宝永三年丙戌歳四月十三日写之」という奥書がある。本書の朱註には学習院本と同じく「貞丈雜記」の内容と類似している点が多いことから考え、伊勢流故実に関係する者の手によって書写されたとも考えられる。

(ロ) 学習院図書館所蔵「学習院本」

本書は「伊勢貞文叢書」一四〇冊の写本のうちに含まれているもので、「須貝藏弄」の印が内題の下に押されている。本文の字句、条目の立て方、朱註は全く松岡本と同一である。

(ハ) 宮内庁書陵部所蔵「静幽堂叢書本」

「静幽堂叢書礼儀部六」は「御代武家諸法度」、「東照宮御文」、「最明寺殿庭訓之書」、「今川壁書解」、「伊勢貞親教訓書」、「貞丈家訓」をもって一冊とした写本である。この教訓書が松岡本を転写していることは、巻末の「寛永三年丙戌歳四月十三日写之、乞于伊勢氏貞春而写之干時享和三年壬戌正月五日」という加筆により明らかであるが、

松岡本と異なる点は、第二十八条「家中代々の宿老に」の条文が第二十七条「人と参会せんには」の後半に接続しているため、全文は三十六条で構成されている。

B 系統の写本

(二) 宮内庁書陵部所蔵「統群書類従本」

この写本は「統群書類従」巻第九四七に所収されており、その書名の示すごとく「統群書類従」の原本で、「多胡家訓」⁽¹⁾、「為愚息教訓」、「尾篋集」の三書をもつて一巻をなしている。内閣文庫本をはじめ他の写本がいずれも比較的美しい筆跡で書写されているのに対して、統群従本は判読困難な書体が多く、これに因り刊本「統群書類従」(第三十二輯 雑部)所収の「伊勢貞親教訓」に誤読、脱字が多いものと老えられる。

(三) 内閣文庫所蔵「内閣文庫本」

「多賀家訓一名三将遺辞」⁽¹²⁾の表題をもつこの写本は、「多賀家訓」、「為愚息教訓一札」、「今川了俊愚息仲秋制詞条々」、「細川玄旨示家臣十一条遺辞」、「尾篋集」からなる五つの武家々訓と「前左大臣尊氏卿遺書事」という二冊を合せて一巻としたものである。「統群書類従」の原本と同一系統のため校訂の際極めて便利である。

(四) 静嘉堂文庫所蔵「温故堂本」

「群書類従」編纂の際、温故堂と号した塙己一が、その保存用として転写させたものが本書である。したがって、写本(二)と同じであるため、両写本を比較することによってその補正に便である。

C 系統の写本

(1) 早稲田大学図書館所蔵「尊経閣文庫本」⁽¹³⁾

前田利嗣家旧蔵になるこの写本は、室町末期の書写と言われている。本文の条目の立て方はA系統(イ)、(ロ)と同じ

ではあるが、字句についてはB系統(付)に類似しているのでA、B両系統の中間型と考えられる。なお、この前田家旧蔵本については明治二十一年、当時の修史局で影写本が作成され、現在東京大学史料編纂所に所蔵されている。

D系統の写本

(付) 島原市立公民館所蔵「松平文庫本」⁽¹⁴⁾

写本の表紙の題簽には「伊勢定親教訓状」となっているが、内題は「為愚息誠教一札、三十八ヶ条」とある。奥書の年代もなくたゞ本文のみ書写されたものであるが、A系統の本文第十條の後半「人に物をとらせば」以下を独立させ、これを第十一條としているため全文は三十八條で構成されている。⁽¹⁵⁾ 本文の内容から考え、A系統に最も近いものであり、またB系統(付)に類似している箇所も処々にあるため別系の写本として校訂の際に便である。

以上の四系統の写本に基づいて、本文条目の立て方を検討してみると、全く系統を異にするのはAとBである。この二系においては、一部字句の相異のあるほか本文第三十二條「鞠の事」がA系の写本には加えられておらず、また条目についても次に示すように、第十條、十一條が前後している。つまりA系第十條はB系第十一條がその前半に、後半にはB系第十條の前半が接続して一條目を構成している。

(A系統)

一、召使者、物の奉行などする者は客来のあればまゆ

をひそむる物也。かやうの族は我が身の依怙をおもひ、

主の事をばおもはぬなり。すみやかにふちをはなし申べ

し。人に物をとらせは、分際に随すべきなり。百姓等

の進退はつひえにしづめは、そのまゝしづむなり。かた

(B系統)

一、人に物をとらする事も分に随てすへき也事もかゝ

ぬ者よりも疲労したる者に別して心を可懸也。百姓等の

進退はつるへに沈めは其儘沈む。如形も在所を領する者

は一年過て一年こゆれば又如本成なり。是をおもはすし

て公界の仁儀を闕、人にわるくいはるゝは無器用の至

のごとくも在所を存する者は、一年過ても一年こゆれば也。一天の主を始め申其国の守護夫に随て分際つるへに本のごとくになる。是をおもはずして公界の仁儀をかき沈て身を失なふためし有間敷也。一代はともあれ当代を人にあしくいはるゝ事、無器用の至なり。可為本。

一、一天下のあるしを始たてまつりて、其国の守護、一、召使者の奉行なとするものゝ客來のあれはまゆをそれに随て分際につひえにしづみて、身をうしないぬるひそむる物なり。かやうの族は我身の依怙を思ひ主をおためしあるまじき也。一代の後はともあれ、当代を本ともはぬ者也。速に扶持を可放也。すべし。

〔3〕 教訓書の内容について

「為愚息教訓一札」は三十八条の本文とその成立事情を記した末文、及び和歌一首から構成されている。本書の成立を長祿年間と考えれば、応仁の乱に先立つこと八、九年、いはゞ室町幕府の転換期にあたる。義政による寵嬖政治の弊害は幕府の統制力の破綻、相続く徳政一揆に対する徳政令の発布となつて現われているが、その時期に政所執事として財政権を握り、殿中惣奉行を勤めその作法を伝えた貞親は代表的な寵臣であり、その思想は下剋上の世に移る転換期における武家貴族の現実に対処する姿勢を最もよく示しているものと思われる。

貞親の教訓書をみると、まず第一に「仏神の信敬」については「王城の鏡守靈仏靈社、又は領中に奉崇処神社堂塔の修造」（第一条）は分限、身分に應じて心掛けるべきことが説かれ、「志に随て法施をさゝげ武命長久家門相続の可奉祈嘉運」（第三条）ことが述べられる。これと関連して若くとも生死一大事にのぞむ武人の覚悟を平生から心掛くべきために、「世間無常の理を存、慈悲を先として唯法界の一理を心に懸くべき」（第三十一条）として、

「其家をそだて子孫の榮耀を祈らん者不信にてあるべからず」「弓矢にたづさはらんほどの者信なくしてはあるべからず」（第三十八條）と強い信仰の態度を要請している。しかし、貞親にとって仏神の信敬は伊勢家の嘉名と繁栄の手段であり、そこに説かれる「慈悲」すら

人に物をとらする事も分に随てすべき也。事もかゝぬ者よりも疲労したる者に別して心を可懸也。百姓等の進退はつるへに沈めば其儘沈む。如形も在所を領する者は一年過て一年こゆれば又如本成なり。是をおもはずして公界の仁儀を闕、人にわろくいはるゝは無器用の至也。

のごとく百姓へのいたわりについても慈悲の心でなく、形に現われるべきものとして説かれている。

第二に「公儀における注意」があげられる。まず女中、召使に対しては、來客をいとう召使はたゞちに扶持を放すべき（第十一條）であり、召使者と心安く雑談すると「打くつろぎて必無礼に成也。心安所存出来て主をあたなどる」（第十二條）ことになるので召使にも礼を守るべしとする。殊に若き者が女中と親しきは「見苦其上に無実のことがおふ」（第二十五條）ことにもなりかねない。まして女中の住居に立寄るべきことは固く禁ずる（第五條）。主たる者は

いかにも早且より夕に及ぶまで面に出て、当番の者又用あらん者に対して直に公事をもきゝ面々に目を見合て詞を可懸。奉行心に掛る者は主の目に見ゆるを満足とする。数日を経れども目にも見えねば出て用たしとて奉公にうとむ也。能々可心得事。（第五條）

とその心得を説いているが、こうした部下の統制においても貞親はその懷柔策として、

上意よきもの又はくちなどきくものは常に呼て智音して、物をもらすべき也。かやうなればいふべき事をもいはず、かたふどになる物なり。（第十九條）

のごとく、その功に報い口をきいてやり常に物など与えて喜ばせてやれば、かえって自分の味方にさえなってくれるものだと誠めている。とくに宿老との協調をすゝめ、「別て可懸目」であり、「其身無器用ともあるべきごとく」にすべきなり。是家を治る詮也」（第二十八条）とある。

第三は「文芸武芸の稽古」に関する教訓である。芸能については若き者が「さのみすくみて相撲、力能、鷹などを嫌ふは悪き」ことであるが、これも「人の目にたゞぬ程にすべき」（第十三条）である。弓馬の道は旦夕心かけ毎日おこたることなく励めば「年功入ぬれば犬追物などに越度なき」ようになり、猿楽なども人によりて能し了せたるは還て見苦きものであるが、

当世人の翫なれば大たゝいし了せたるが好也。仁たるものゝ小利口に猿楽同前にし了せたる更に見事にあらず。

よきほどに可斗也。（第十四条）

と注意している。さらに歌道についても「器用なくとも如形も可智」（第十五条）であつて、「此道は道よりも芸を專にせよと先人申したり。たゞ作を心に可懸」（同）であるとする。その他、鞠（第三十二条）、連歌（第三十三条）について言及しているが、貞親にとっては文芸はあくまで二義的なものであり、平安朝文芸による心の修養は全くふれられていない。したがって、月雪の風流のたしなみを奨励する条でも、所詮「心ばせやさしく見ゆる」（第二十三条）ことに求められたのである。

ところで、この教訓書の最とも特色のある点は第四「平生の行儀」についての詳細な教訓であろう。まず対人関係については、「いかなる不肖の者尋来ともかろく」と出て対面すべきであり、たとえ病の床に伏している時でも久しく会わぬ人が尋ね来た場合には、白衣でも会えば「無隔心様に見てよろこぶ物」（第二十条）である。会わずして帰すと「世上にてあしきやうにいひなすほどに聞伝て、其人をいひけつ」（同）ことにもなるので充分心掛け

るべきである、と説かれる。したがって、たとえ氣の合わぬ者が来ても対面すべきであり、「敢て其色を見すべからず。みすれば弥々あだと成」（第二十四条）。さらに遠国よりの来客には待たせることなくすぐにでも会って、「其国の事をも問、懇にあいしらふべき」で、さもないと「我國にてわろく、いひなす」（第三十三条）ことにもなる。特に対外的な配慮として贈答に対する応待に至っては、

いづくよりも珍物倒来せば不寄多少可進上也。殊初物などは一つ二つ其興あり。（第七条）……他家より人の物くれたらんには、相當に価するほどの返しをすべ也（第三十六条）

のごとく、初物の進上の際の注意、贈答に対する配慮を述べている。日常生活における「食事作法」は、

朝夕食の事、女中にて用る不可然。面に出て同名より子内の者の前にて可用。不珍物成とも、美物倒来せば前にて調美させて肴にして酒をすゝむべき也。内にて食する事をしつれば放埒なる心も出来、又は稀に人前にて食する時見苦曲出来也。人前にて食つけて何かわろき曲あるなど人に見せて直すべき也。是御前にての覺悟に成也。人前にて食すれば人の来にも我がめしをわけてくわせて酒をすゝむる興ある者也。（第八条）

とその心掛けを説き、さらに「衣装」（第十六条）、「刀」（第十七条）、「軍陣の出立」（第十六条）について言及している。このように平生行儀に対する詳細な配慮は、すべて味方する者の一人も多きを得んがためであり、そのためには未練の者（条二十三条）、無能なる者（第二十六条）をさけ、風雅をしり智恵ある友をえらび（第二十二条）、経験豊かな宿老と雑談すべきことをすゝめるが、その場合においても

人にちかづくとも其人二日とも無音せば人をつかはし、文をやりて呼べし、さなければ別て智音の廉なく只平人のあいしらしいに成也。左様に懇なれば別て悦で、世上に人ずきなる人かな、といわるゝ物也。（二十二条）
という外間に対する配慮がみられる。それ故、貞親にとっては酒宴の興行すら

人に酒などすゝむる事第一人にちかづく媒となるなり。あながち其にふける心にはなけれども、風情あれば人もこぞり無音も知音に成友にしたしむ。外聞もよき也。汝ごときの者は能才も入べからず。たゞ上意を始め奉り田夫に至迄わらくいはれぬを第一詮とす。ゆびをさゝれば家門断絶の始としるべし。細々の風情は一段と看など取持ずとも酒をすゝむる興行は常に可懸心也。（第九条）

とあって人に近づく媒として心掛くべきものとされている。

教訓の内容は大体右の通りであるが、そこでは「外聞もよき」「わらくいはれぬを第一詮とす」「影にてゆびをさゝれなば家門断絶の始」とか「わるくいはるゝは無器用の至」また「人の目にたゝぬ程にすべき」などの言葉で示されているごとく、他人の評判、噂に対して「よき者」と見られるべきように日常生活のすべてにわたってその心得を教訓している。そこには心の働きとしての慈悲、公正、正直はみられず、他人の毀誉褒貶に気をつかいこれにとり入るとする打算的な処生術がはつきりうかゞえるのである。室町中期の腐敗した幕府を代表する一人の武家貴族伊勢貞親が嫡子貞宗に希求する最大の願いはこうした洗練された上辺を飾る社交的保身術によって、「我が家者殊天下の鏡」となるべき名きこえある家の嘉名を子孫代々に相続することであつた。私はさらに室町時代の倫理想を次に考察することにより、貞親の教訓書がこの時代において極めて異質的な内容をもっていることを明らかにしてみたいと思う。

二、室町時代における貴族的武將の倫理

〔1〕 儀礼尊重の精神と故実的世界の形成

室町幕府の成立に関する歴史的背景については、今ここで改めて論ずるまでもないが、足利氏による政權掌握は建武中興の理念より脱落し武家政治の再興を願う有力守護、武士層の連合団結に基盤をおき、しかも利害打算の觀念が全面的に支配しているとき、鎌倉幕府の支配体制とは著しく変質しているのは当然と言えよう。その意味で足利政權はいはばこれら有力守護の寄合世帯であつて、將軍はその勢力の均衡と相互拘制の上に存立する傀儡的存在にすぎない。したがつて幕府成立の頭初からすでに対立相剋の禍根を内在した室町武家社会にあつては、恩賞が忠節、奉公の前提と考えられ、鎌倉武士にみられた主従の精神的結合としての「猷身の道」の伝統は地に墜ちるに至つた。主従の共同体を支える倫理的紐帶を失つた武家社会では、その統卒者としての將軍に絶対的權威なきことは必定であり、下剋上の精神はおのずから顯現する内部の要素を創設頭初よりもつていたのである。

さて幕府の政治方針の根本を示した建武式目の「政道事」の昌頭をみると、そこには

右量_レ時設制、和漢之間可_レ被_レ用_二何法_一乎、先逐_二武家全盛之跡_一、尤可_レ被_レ施_二善政_一哉、然者宿老、評定衆、公人等濟々焉、於_レ訪_二故実_一者、可_レ有_二何不足_一哉。

とあり、その末尾には

遠延_二喜天曆_一、兩聖之德化、近以_二義時泰時父子之行狀_一為_二近代之師_一、殊被_レ施_二万人帰仰之政道者_一、可_レ為_二四海安全之基_一乎。

とある。これによると室町幕府の施政の根本は、鎌倉時代の貞永式目と故実先例の踏襲に準拠するばかりでなく、武家社会の限界を越え宇多、醍醐の延喜、天曆の徳化を基となして万人帰依の政道を施すことにあった。建武式目に「徳是嘉政、政在安民」という古語が引用されているごとく、各条文の内容はいずれも儒教的な徳治思想と人倫的国家の理想の伝統にもとづく仁政の実現を強調している。貞永式目が右大将の先例に拠る現実的な道理を基底とする具体的な武家的式目であったのに対して、建武式目は支配の現実から遊離した理想主義的傾向を如実に示していると言えよう。さらに注意すべき一条として「可専礼節一事」では、

理国之要無過好礼。君可有君礼。臣可有臣礼。凡上下各守分際。言行必可専礼儀乎。

とあるごとく、貞永式目にはない礼節を標榜する条文が加えられている。

私は建武式目における故実先例尊重と上下各々その分際に応じた儀礼作法の精神に注目し、これに相応した政治の有職故実化と政活における儀礼の層位化こそ室町時代固有の時代精神の動向を示す一つの指針ではないかと思う。倫理的紐帯を失った室町武家社会において、故実による君臣の儀礼の秩序づけは、將軍を中心とする層位的秩序のいばゞ足利的再編成であった。かくして、政治的世界と故実的世界は同心円的存在であり、前者の衰退は後者の形式化、煩瑣化となって現われてくるのである。

故実という語は本来公家有職の対称として武士社会における諸事象の先例典拠たるべきものを意味するが、その語意について伊勢貞丈は

故実と云詞は唐土の書より出たる事也、史記魯世家、註云故実、故事之事之是者云々、比心は故実といふはふるき事を云也と云心也、又文選四十六の註に云、故実、先王文道也云々、比心は故実といふはむかしの天子禹王湯王文王などの定め置れ事をいふと云也、日本にていはく公家方にては昔神武天皇以来定め置れ事を故実と云、

武家にては頼朝以来京都將軍などの定め置れし事を故実と云也⁽¹⁶⁾

と述べている。武家社会における先例尊重の観念はすでに貞永式目、吾妻鏡⁽¹⁷⁾にみられるが建武式目では武家の先例とともに公家の先例を求めていることが前述の条文で明らかである。室町幕府が京に設置され、政治的にも公武の交渉の度を加え、さらには、武家による公家有識の意識的な吸収の結果、新たに故実の世界の形成をみるに至った。

將軍義満の時代は、幕政確立期と言われるごく、山名氏清、大内義弘の反幕勢力の制圧、三管領四職をはじめとする諸職の確立、南北両朝の統一を実現するとともに、他方では永和元年從四位下參議兼左近衛中将として初めて参内して以来、左大臣、准三宮、從一位太政大臣の極位にのぼり事実上、公家社会の頭首となっている。公家社会との政治的交渉の深化につれ、義満自身、前関白准三宮二条良基により宮廷での作法進退、和歌連歌をはじめとして香合・花合せなどの遊戯について公家の最高格式をもつ撰閑家の有職に基づいて指導されて⁽¹⁸⁾いる。義満による公武の政治的統一は、結果的に幕府政治の有職化、總じて形式化は決定的になっていった。「鹿苑院殿御元服記」「鹿苑院殿御直衣始記」をはじめ「年中定例記」「正月事始記」などの公家的な記録や年間行事記の作成は何よりもこの傾向を示している。こうした事情を背景にして武家儀礼の統一とその成文化が「三議一統大變紙」の編纂の試みとなったのである。故実により固定された層位的秩序を維持し、これを強化するためにとれた観念的方法が建武式目にみられた礼の精神の強調であり、その具現としての礼儀作法の煩雜化が、いはゞ鎌倉幕府のひこばえ的政權にすぎない室町幕府の故実的世界の成立であった。しかもその場合、礼として特に強く説かれるのは

臣は君をたつとみ、子は親に孝し、弟は兄にしたがい、老たるを敬て上にしてあなどらず、下にしてみだりならず。是をなづけて礼と云。……惣じて、人は身のほどよりも過分にふるまふ事不可然。末重き物はかならず折る

といへり。根より技葉のかちたるは、終にわろきと申也。かまへて上に下のまさる事あるべからず。上をかるしめおのれを先とするたくひ、尤しかるべからず。⁽¹⁹⁾

とあることを、建武式目の「各守分際」と考え合せるとき、室町幕府において礼の強調された現実の地盤が何であつたかを知ることができよう。義満の時代以後、義政、義尚の時代を頂点として実に多くの故実書が相ついで成立しており、しかもその礼法が形式化、煩瑣化を強めている事実こそ室町幕府の内部矛盾を露呈しているのではないであらうか。こうした時代精神を背景に考えて、幕政の中心をなす武將の思想を教訓書に手掛りをおきながら考えてみたいと思う。

〔2〕 教養ある武士

將軍義満の代、細川頼之のあとをうけ前後二回十七年にわたり管領をつとめた斯波義將は、「竹馬抄」⁽²⁰⁾という教訓書を書残している。応永十五年四月義満の薨去にともない、朝廷は義満に太上法皇の尊号を贈ったが、義將は人臣の尊号は昔よりその例なしと説き、將軍義將をして辞退せしめている。義満なきあと義持を補佐し、足利氏の公家化をとどめ武家本来の姿に立ち帰るよう努めたと言われる彼は、君臣関係について

かならずまづ恩を蒙て。それにしたがひて。わが身の忠をも奉行をもはげまさんと思ふ人のみ侍なり。うしろざまに心得たる事なり。もとより世中にするは君の恩徳なり。それをわすれて猶望を高くして。世をも君をもうらむる人のみ侍る。いとうたてしき事也。

と当時の個人的私欲による君臣の結合を批判している。その主張には鎌倉期にみられた献身の觀念が強く説かれてはいるが、他の教訓をみるとき所詮、義將も室町期の武將としての思想的限界にあることが理解されよう。

「竹馬抄」の序文に

よろづのことにおほやけすがたといふと眼といふことの侍るべき也。このごろの人おほくは。それまで思ひわけて心がけたる人。すくなく侍る也。

と述べているが、この「おほやけすがた」と「眼」という言葉は何よりも作者の倫理的自覚を示している。義将は弓箭とりの心掛として「わが身のことには申におよばず。子孫の名をおもひて振舞べき」ことを主張し、万のことに私心なく、時と場所で見通せる眼を養うこと、そのためには主観的感情や意欲のまゝに振舞うべきことを誠め、「心をあはつかにうか／＼とは持つまじき也。万のことにかねて思案してもつべき」であり、しづまった心でよく理非をわきまえるべきであると説いている。したがって「武士といふ者は。僧などの仏の戒を守るながごとくには有が本にて有べき也」、「弓取と云は。必唯心の上手に有。されば寝ても覚ても此態を思はなすべからず⁽²¹⁾」という「渋柿」の訓誡を受けて、義将も「よき弓とりと仏法者とは。用心おなじことぞ申める」と結論している。

彼が「おほやけすがた」と「眼」という言葉で語っているごとく、人間の行為の客観的意義に着目し、これにもとづいて武士の心得、作法における行為の客観的規範を十ヶ条にわたって述べている。その主な点を指摘すれば、まず第一に「人の立振舞べきよう」では「行儀作法」について

人の立振舞べきやうにて。品の程も心の底も見ゆるなれば。人めなき所にても。垣壁を、目と心得て。うちとくまじきなり。まして人中の作法は。一足にてもあだにふまず。一詞といふとも心あさやと人におもはるべからず。たゞ色を好み花を心にかけたる人なりとも。心をばうるはしくまことしくもちて。そのうへに色花をそふべき也とある。これを見ると人はその立振舞で品も程度も心の底さえ見透せるからして、人目のない所でも垣壁を目と心得打解くべきではなく、またその言葉によって腹中を他人に知られるため、人中にあっては雑談を慎むべきことを

誠めている。人中の礼儀作法は「心をばうるはしくまことしくもつ」ことによつて養われると考えている。

第二は「親子の關係」である。彼は愚かな親といえども子はその教えに従えば

まづ天道にはそむくべからず。まして十に八九は。おやの詞は子の道理にかなふべき也。

それ故、生々とした時代の生活体験は尊いものであるから「他人のよきまねせんよりは。わろきおやのまねをすべき」であり、かくすることによつて「家の風をもつたへ。その人の跡ともいはる」ことになる。この内容は孝行の現れ方の時代的傾向を示しており、また親に対する報恩の問題については言及されてない点も注意する必要がある。

第三は「神仏の崇拜」である。神仏を崇めるのは世のため人のためであり、

たとひ一度のつとめをもせず。一度の社参をばせずとも。心正直に慈悲あらん人を。神も仏もをろかに見そなはしたまはじ。

とあるごとく儀礼的な崇拜を戒め、正直、慈悲をその原理とする。したがって、

たゞ後生善所と祈ほかは。仏神の願望待べからず。それぞしるしも侍べけれ。それすら真実の道には。直にいたらずとぞ教き。

と戒めている。

これら三ヶ条において、義將は一般の人々にも通ずる日常生活での礼儀作法、その心掛けを説いているが、第四条から七条では公人、武士の心掛として「君に仕える心掛」「その奉公の仕方」「能を身につける心掛」「人を使う用心」と具体的に訓誡している。そこでは

心のまことなからむ人は。なにごとにつけても入眼の侍まじきなり。万能一心など申も。かやうのことを申やら

んとおぼえ侍也。ことさら弓箭とる人は、我心をしづかにして。人のこゝろの底をはかりしりぬれば。第一兵法とも申侍べし。

とあり、詩歌管絃・連歌・鞠・文学・囲碁・象碁・雙六・的・箏懸・犬追物についてその心得を述べている。これに続いて、立派な行為をなすべき人物としての心の修養、即ち人格の修養について第八条以下の三ヶ条にわたって説かれている。

尋常しき人は。かならず光源氏の物がたり。清少納言が枕草子などを。目をとめていくかへりも覚え侍べきなり。なによりも人のふるまひ。心のよしあしのたゞずまひををしへたるものなり。それにてをのづから心の有人のさまも見しるなり。（第八条）

男女の色好の名をとりたる人は。別の子細なし。たゞ心を花月にしめて。世間の常なき色をくはんじて。こゝろを細くもち物の哀をしりて。こゝろざしをうるはしくせしかば。能も才も人にすぐれて。やさしきかたより。此道の名をとり侍りき。（同）

この内容をみると、義將が有力守護の対立相剋の実力の世に生きる武將であることを想起する必要がある。

「竹馬抄」の内容をたどりながら、室町時代盛期の倫理思想を考えてみると、次のような特色を指摘できるものと思う。まず第一に正直慈悲公正といったわが国古代の人倫的理想がその規準となっており、そこには武者の習の伝統が表面から消え去って、武士社会の限界を越えた普遍的倫理が強調されていることである。これと関連し第二に教養の基礎として平安朝の文芸が詳細に記られ、教養ある武士、文武兼備の道が説かれている。これらの特色は、義將とははゞ同時代の今川了俊にみられる。九州探題として盛名をはせ、歌人として名高い彼は、

三代集の哥の外にも。常に可_レ見抄物事。卅六人家集等。伊勢物語。清少納言枕草子。源氏物語等なり。此等

は哥心付ものなり。又詞のための稽古には。初学抄。俊頼秘抄。顯注密勘一字抄などなり。かたはらいたき事なれども。愚老が哥心の付たる事は。源氏を三反披見して後より。風情も心も出来し也。⁽²²⁾

と説いている。平安朝文芸に対する観点は両者においては異なるにせよ、了俊が子仲秋に与えた「今川了俊制詞」において文道を重視している理由を考えれば両者は基本的には一致しているものと思われる。第三は、義將が「おほやけすがた」と「眼」という言葉で表現しているごとく、単に心の修養にとどまらずその顯現としての客観的意義を重視していることである。正しい心は美しい形をとるとともに、美しい形は正しい心を育てるという考えに基づき、行為はその内面性と外形性の関連のもとにとらえられる結果、行為の客観的規準が強調されるのであった。義將の「竹馬抄」で説かれている訓誡はあくまでも個人的な体験を通して得られた彼自身の、又室町幕府の理想であって、当時の現実を動かしていく力のあるものではなかった。この理想と現実のずれこそ、先にみた建武式目と同じく、室町時代盛期の倫理思想が何にもまして表現しているところのものではないであろうか。

〔3〕 方便道徳と徳治論

室町幕府創設以来の不安定の禍根をなす將軍と有力守護との勢力の均衡関係は、義満の代に將軍の統制策によりその影をひそめ、幕府の政治的支配権の確立にともなう政治の有職化、儀礼作法の固定化をみるに至り、ここに故実の秩序による世界が一応の安定をみたのであった。しかし、義満以後この頭初より内在する禍根は事あるごとに表面化し、義教の代ついに赤松満祐による將軍弑逆（嘉吉の変）という最悪の事態を生じたのである。一家臣の私怨による將軍弑逆は、將軍を唯一の中心とする武家社会における最大の危機を意味するものである。これを契機に細川、斯波、畠山などの有力守護が、特に幕政の中核である管領職をめぐり対立抗争し、義勝、義政の時代に至っ

てはもはや將軍の權威の失墜は著しく、土一揆、徳政一揆は相ついで發生し、こゝに応仁・文明の大乱を境に下剋上の世の出現をみたのである。

ところで、武家社会安定の原理である將軍の絶対的權威が分に応じた行為規範を定める故実という実効のない伝統的秩序に求められたとすれば、個々人の恣意的振舞はその分の觀念の否定を意味する。幕府創設の頭初よりこの傾向はあったにせよ、下剋上の社会的發現はまさに伝統的秩序の混乱であった。こうした將軍の統制力の衰退にともない、礼の精神の具現としての礼法は著しく形式化、煩雜化し現実遊離の傾向を強めたのである。故実書のほとんどは応永から永正、天文頃までの間に成立しており、犬追物・鷹・武具・刀をはじめ食事盃酌・書札礼・服飾・物の贈答授受の作法、さらには主君の背中への流し方、手水のつかわせ方などまさに「箸の上げ下げ」に至るまで、武士の日常生活の全般にわたって驚くほど詳細な式法の規定がみられる。その一例をあげると、風呂の入方については

風呂に入る時は左の足より入べし。出る時は右の足より出るべし。惣じて風呂にて横にいてあかをかく事なかれ。⁽²³⁾
賞翫の人。風呂へ御入の時。垢をかくべき事。両方の指の爪を添て。いかにも静かにかくべし。吹事も音せぬ様にふくべし。殊に拍子にかゝり吹事。尾篋のいたりなるべし。⁽²⁴⁾

とある。

このような時代的傾向の最とも著しい時期に、幕府殿中の諸行事を掌る惣奉行としてその作法を伝えた伊勢氏が、師範家として故実の世界にあって最高の地位を占めたのは言うまでもないであろう。前節において考察したごとく「為愚息教訓一札」では平生行儀についての教訓がその中心であった。しかも「外聞もよき」「わろく云われぬを第一詮とす」「わろくいはるゝは無器用の至」「人の目にたゝぬ」「影にて指をさゝれぬ」のごとく、他人の毀誉褒

貶を氣にしてこれにとり入ろうとする打算的な処生術が強調されていた。したがって、そこには行為者の人格を修養する教養としての平安期文芸も説かれず、正直、慈悲、公正といった古代人の倫理は存在する余地すらなく、洗練された上辺を飾る社交的な手だてによって、幕府権力の衰退期において自己の権勢を維持すべき保身の術としての方便道徳が教えられている。貞親の教訓は今川了俊、斯波義將においてみられた普遍的な倫理思想と全く異なり、あくまでも現実に着した方便道徳をその内容としていっているところに、下剋上の世を迎えた一人の武家貴族の倫理思想が表現されている。

かゝる時期において生じた注目すべき現象として、徳をもつて幕府政治の權威化を意図する政治論が主張されたことである。応仁の乱勃発に際し再度関白をつとめた一条兼良の「文明一統記」「樵談治要」は、將軍義尚の政治の心掛けを説いたものである。前書は主として將軍の個人的心掛けとして六項目をあげ、後書は政道の詮要を八ヶ条に分けて述べたものである。両書の内容をみると「正直をたとふべき事」「慈悲もばらし給べき事」「芸能をたしなみたまふべき事」「諸国の守護たる人、廉直を先とすべき事」のごとく、正直、慈悲、清廉といった古代の人倫的理想がその基礎となっている。この政治の理想を実現するための將軍の威勢も、兼良にあっては八幡大菩薩に威勢を加えたまえと「至誠心に御祈願有べし」ということに求められた。したがって、応仁の乱にはじめて出現した足輕は「超過したる悪党」にほかならず、

洛中洛外の諸社、諸寺、五山十刹、公家、門跡の滅亡は、かれらが所行なり、かたきのたて籠たらん所にきては力なし。さもなき所々を打やぶり、或は火をかけて財をみさぐる事は、ひとへにひる強盜といふべし。かゝるためしは先代末聞のこと也。⁽²⁵⁾

と論じている。兼良の政治論は現実の諸問題に対する対策を説く意味では現実への関心を示すものゝ、その具体策

を論ずるときは觀念的な徳化に終始して局面打開の積極的な力となりえぬところに、現実から遊離した觀念的なものと言わざるをえない。しかしその内容が現実^ニに妥当しえぬものであるにせよ、その理想が普遍的な人倫の徳を説く限りにおいて室町時代の政治論の特色を備えているのである。政治論の根底にある徳政の觀念はすでに建武式目にあり、その理想が支配の現実と一致せず遊離した姿こそこの時代固有の倫理想でもあった。したがって下剋上の世の出現をみた時期での兼良の政治論では、その理想がさらに觀念化され、現実との遊離を強めたのは当然の帰結であるといえよう。

応仁の乱前後の層位的秩序の混乱した社会に生きる武將伊勢貞親と公家一条兼良との思想を考えると、両者の倫理観は全く異質的なものであるにせよ、そこには所詮亡びゆく室町幕府の代表的な武家貴族と公卿の現実に対処する姿をみることができよう。「君臣失道父子違禮、殺君殺親、立邪立非」という下剋上の世界は、將軍の權威の失墜に始まり、伝統的勢力や形式的な儀禮の否定をもたらしした。「凡例といふ文字をば、向後時といふ文字にかへて御心えあるべし」「凡例と云は、其時が例也⁽²⁶⁾」という山名宗全の言葉が示すごとく例になつむ者は衰え、時を知る者は栄える世となつたのである。

〔4〕 道德的人格の形成

ここで、群雄割拠の戦国の世は伝統的權威も崩壊し、実力さえあれば天下の覇者たりうる時代であつた。したがって、自国を治める戦国武將にとっては、支配者としての新しい權威が求められ、人間的結合をかつとる精神的自己の確立が求められた。そこではもはや形式的な上辺だけの方便道德も家柄のよさも無力と化し自国の興廃は自己の一身にかゝると自覚した支配者たちは、ありのまゝたりうる人間的、道義的な強みと自己の道義的人格の形成のみ

人心をひきつけうることを体験し、そこに政治の要訣を見出したのである。「早雲寺殿廿一箇条」「上杉定政状」「朝倉敏景十七箇条」「多胡辰敬教訓状」などの家訓、教訓をみると弓馬の道をはじめ神仏の崇拜、正直、慈悲、分別、道理、芸能、手習学問などがいずれも生の体験を通して語られている。そこでは、文武両道を通して道理をわきまえ、道理にしたがって分別することが人倫の道を実現するものと自覚され、この自覚から正直、慈悲、智慧の理想を個人の心構えや気組み中に貫徹する「自敬の道德」が生まれたのである。これら武將達のきびしい生活の中におのづと育った慣習の倫理的自覚を物語る家訓、教訓をみると、室町期における人倫の理想が戦乱を通して内面的に深化され現実に着した道義として自覚されていることが理解される。この自覚にもつき正しい作法、分に應ずる礼節も内の慎しみがその根底となつて、ここに神仏や社会の風習といった外面的な拘束力をはなれて、個々の人間を本とする倫理が生れたのである。⁽²⁶⁾

かくして、室町時代においてみられた政治的理想としての人倫の道と儀礼尊重の精神は、戦乱の世に生きた戦国武將の体験を通して道義的に自覚されたのである。こうした思想的経過を考えとき、伊勢貞親の教訓書がその過渡期における武家貴族を代表する特殊な内容をもっていることがわかんと思う。

註（一）「貞丈雑記」卷十二、刀劍之部に「伊勢守貞親の子息貞宗への教訓書に當世ある人を見るにわきざしとてさす是は隠劍とて人にかくしてさす事也云々此教訓書は東山殿の代長禄三年にしるしたる書也」とある。

（二）貞親教訓書の卷末に、「右の條々子を思ふ心の闇にくらまされて暁のねぶりをさますごとにおもひ出る事どもをつくすなる心に猶をろかなる筆にまかせて貞宗にあたへ侍る」と記されている。

（三）蟬川氏は物部守屋の末裔といわれ、大田左衛門尉式宗をその始祖する。その孫親直は治承四年頼朝の伊豆挙兵に先駆をなし、越後国礪波、新川の両郡を領す。新川郡大田莊蟬川村に住み蟬川を姓とする。そのご親朝が尊氏に仕え、その妹惠雲院は伊勢右衛門尉貞信に嫁ぎ以後伊勢氏と縁を結ぶに至つた。親朝の孫親当は倭漢の才あり、政所代となり代々その職を仕める。親後は通称を新右衛門尉といひ、のち大和守親世と改め、家職を受けて幕政に預かつてゐる。貞親の

子貞宗の作「伊勢兵庫守貞宗記」（統群書類従、第二十四輯上、武家部）の昌頭に「万牒方聞書」とあり、奥書には「右一冊は蜷川新右衛門入道道標家之日記之由、貞享二年阿州住某所写し之、奥書にみへたり、猶考べし」とあることから考え、聞書とあるのは貞宗が聞書したのではなく道標（親俊の子親長）が貞宗から聞書したものを書き留めたもの推定される。伊勢氏と蜷川氏の関係は政所執事とその沙汰人及び結縁の間柄にあり、この密接な関係から「親後は成」と後人が誤って書き入れたのであろう。

- (4) 「貞丈雜記」巻一、礼法之部に「鹿苑院義満將軍の御代小笠原兵庫助長秀今川左京太夫氏頼伊勢武藏守満忠或ハ憲忠トアリ此三人に被仰付て天下の礼法の書をえらみ定られ其書を当家用法集三儀一統大双紙と号する由世の人普くいふ所にして三儀一統と云書に其事に見えたり然れ共、偽也右の氏頼満忠其家々系図に無之長秀は小笠原の系図にあり、一人の私の覚書にしたる書に後の人序文を作り加へて三家の事を作りなし三儀一統と云名を付替へたる也本名は当家用法集也其書の一体將軍の仰を承て書たる物とは見えすかの義満公の時定のられし礼法の書は応仁の大乱に紛失せる由道照愚草に見えたり又南朝記伝と云書に義持將軍の御代応永三年小笠原長秀今川範忠伊勢貞行に仰せて武家の礼式を定とあり然れども今川伊勢の家譜には其事見えず」と記し、「三儀一統辨」を著わしているが、いずれにせよ伊勢氏が記録の保持者として重視されたことは「花營三代記」をみればわかる。

- (5) 「群書類従」第二十輯、合戦部、卷第三七七五。

- (6) 同、合戦部、卷三七六。

- (7) 「応仁別記」、群書、第二十輯、合戦部、第三七八。

- (8) 「応仁略記」、群書、第二十輯、合戦部、第三七七。

- (9) 「文正記」参照。

- (10) 「応仁記」、「武衛家騒動之事附畠山之事」参照。

- (11) 宮内庁書陵部所蔵、群書類従本の研究については、笈泰彦氏「多胡辰敬家訓考」——戦国時代倫理思想の一文獻——（学習院大学文学部研究年報第一輯）を参照。

- (12) 内閣文庫所蔵、「多賀家訓一名三将遺辞完」の研究については、笈泰彦氏「多胡辰敬家訓の思想」（倫理学年報一輯）参照。

- (13) 尊経閣文庫は加賀前田氏の所蔵とするもので、その量質共に幕府が主力を注いだ紅山文庫にも匹敵し、当時「加賀藩

は天下の書府也」の名を得たと云われる。蒐集事業は藩祖前田利家の室芳春院松子に始まり、三代利常を経て五代松雲綱利に至って大成した。

(14) 島原松平文庫。肥前島原藩主松平氏は寛文九年忠房を初代とし、一時下野宇都宮に移されたが安永三年忠恕の時再び還り、その後忠馮―忠候―忠誠―忠精―忠淳―忠受―忠和とこの地を治め、その間、書籍の蒐集が行われた。

(15) 松平文庫本にもA系の写本と同じく「鞠の事」の条がない。

(16) 「貞丈雜記」、卷十五、言語之部

(17) 「吾妻鏡」嘉禎三年七月十九日条、

(18) 義満は永徳元年七月内大臣に任ぜられて以後、公家式の花押を用いている。

(19) 「宗五大双紙」(群書、第二十二輯、武家部、卷第四一二)

(20) 「竹馬抄」の奥書に「永徳三年二月九日 沙弥判」とあるのを誤りなきものとすれば、当時義将は初度の管領在任中である。

(21) 「渋柿」(群書、第二十七輯、雜部 卷第四七五)

(22) 「了俊辨要抄」(群書、等十六輯、和歌部 卷第二九六)

(23) 「中嶋撰津守宗次記」(統群書、第二十四輯下、武家部 卷六九二)

(24) 「三議一統大雙紙」(統群書、第二十四輯上、武家部 卷六八一)

(25) 「塵塚物語」卷六「山名宗全與或大臣問答事」参照。

(26) 寛泰彦氏「戦国時代の倫理思想」(世界倫理思想史叢書六卷)参照、

伊勢氏系図

季衡―盛光―盛行―(盛長)―頼宗―頼俊―俊経―俊経―盛繼―貞維―貞信―貞行―(貞経)―貞国―貞親―貞宗―貞陸―貞忠

貞孝―貞良―貞為―貞衡―貞守―貞永―貞益―貞丈―貞教

統群書類従(第六輯上。系図部。続卷一四一)所収の伊勢氏系図参照。「」は尊卑分脈になし。

「為愚息教一札」の校訂

刊本「統群書類従」（雑部第三十二輯下 卷第九四七）、「日本教育文庫」（卷一、家訓篇）所収の同教訓書には、かなりの誤読や意味の通じない箇所が多い。私は校訂にあたり「群書類従」の原本であるB系統(二)の写本を底本として、これと同系の(ホ)、(ハ)を用いて訂正を加え、さらに別系統Aの写本(イ)、(ロ)、(ハ)によって、内容字句から考え適切と考えられる箇所については改訂を試みた。

条文	群書類従本（Ⅰ）	日本教育文庫本（Ⅱ）	校訂
9	分際 [○] に可心得事 殊に御氏神 [○] を奉礼者 [○] に 於山門 [○] 修行之儀 女中 [○] 柄 主不見は 面々に目を見合て詞を可懸 [○] 不依多少 初物 [○] 杯は 同苗 [○] より子内の石の前見 [○] に。 用不存物成候 散埒 [○] なる心 人前にて食すれ候 [○] 世渡非僧 [○] などの 人に酒杯 [○] すむる事。 人にちかづく媒 [○] も成也	同Ⅰ 同Ⅰ 於山門 [○] 修行之儀 同Ⅰ 主不見は 同Ⅰ 同Ⅰ 初物 [○] などは 同苗 [○] より子内の石の前見 [○] に。 用不存物成候 同Ⅰ 人前にて食すれば 同Ⅰ 人に酒 [○] などすむる事、 人にちかづく媒 [○] にも成也	分際に随て可心得事 殊には氏神 [○] を奉礼志 [○] に 於山門 [○] 修法の儀 女中 [○] 柄 主に見ば 面々に目を見合て詞を可懸 [○] 不寄多少 同Ⅱ 同名 [○] より子内の者 [○] の前 [○] にて 可用不珍物成とも 放埒 [○] なる心 同Ⅱ 世渡非僧 [○] 同Ⅱ 人にちかづく媒 [○] となるなり

15	14 13	12 11	10
<p>其にふけ。心には 影にてゆびをさゝれなば、 常に可心懸也 事もわぬ者よりも。 つゐへに沈めば。其低沈む。 其国の仁義を闕 其国の守護夫子随而 分際つゐへに沈で。 召仕者の奉行杯 隔心せん人と 法文にも此なの道に根る。 耳ならふ事も それよ習もの人の中に 鷹などけ嫌ふは 越度なきや 人によりて能しにせたるが 還而見苦。 大たゝいしにせたるが 猿楽同前にしにせたる。 可計也 自身によめと仰出されし。予 深更とゆふ 紙のきれる題の心。 当座の辱恥を 芸を専にせば□ 心に可還とや。</p>	<p>同 I 影にてゆびをよられなば。 同 I 事もかゝぬ者よりも、 つゐへに沈めば其低沈む、 同 I 其国の守護夫子、随て 分際つゐへに沈て、 同 I 隔心せん人に。 法文にも此なの道に限る。 同 I 鷹などを嫌ふは 越度なき也。 人によりて能者にせざるが、 還て見吉。 同 I 同 I 同 I 同 I 紙のきれる題の心 当座の恥辱を 芸を専にせよと 心に可懸と也。</p>	<p>其にふける心には 同 I 常に可懸心也 同 II 同 I 公界の仁義を闕 其国の守護夫に随て 同 I 召使者の奉行など。 同 I 法文にも此界の道に限り。 聞ならふ事も それに習もの人の中に 同 II 同 II 人によりて能し了せたるは。 還て見苦。 大たゝいし了せたるが 猿楽同前にし了せたる 可斗也 自身によめと仰出されし節。 深更とゆふ 同 II 当座の恥を 同 II 同 II 同 II</p>	

16 17	18	20	22	23	24 25	28
すぐれたる事の見事なり。 立振舞ふは 脇ざしと云物をさす。 是は隠劔とて 物詣旅行などは 人にすぐれたるも仁によりて かなぐりすてにぐる 不肖の者尋来とも 三握髪、適と 無相果へのとぶらひ 無論心様耳見へ。 唐に身を賤して能心も勝し 仁者にありて 友達の宿所へ 我が所へよび入。 別而智音の□なく。 構て智音すべからず。 悪き事も面打にひいて みすれば弥あだと成べし。 御前江 女中よりあさるゝ事 とがをふなり。 兼行法師がいへるがごとく。 文は大切なり 別而可還目。 あるべきごとくの	すぐれたる事の見事なり候。 立振舞には 脇ざしと太物さす 是は隠劔とて 同 I 人にすぐれたるも仁によりて かなぐりすてにぐる、 不肖の者尋来とも 三握髪、適々 無相果へ人のとぶらひ 無隔心様に見へ、 唐には身を賤して態も賤し 仁は心にありて 同 I 同 I 別て智意の廉なく、 構て智音すべからず、 悪き事も面打にいひて 見すれば弥あだとなるべし、 御前へ 女中よりめさるゝ事 同 I 兼行法師がいへるごとく 又々大切なり 別て可懸目、 あるべきごとく	すぐれたる事の見事なるは、 同 II 脇ざしといふ物をさす 同 II 物詣旅行などは 同 II かなぐりすてにぐる 同 II 無等閑人のとぶらひ 無隔心様に見て 虚に身を賤して態も賤し 同 II 友達の宿所に 我が所によび入 同 II 同 II 同 II みすれば弥あだと成べし 同 II 同 II とがをふなり 兼好法師がいへるごとく 同 II 同 II あるべきごとくに。	すぐれたる事の見事なるは、 同 II 脇ざしといふ物をさす 同 II 物詣旅行などは 同 II かなぐりすてにぐる 同 II 無等閑人のとぶらひ 無隔心様に見て 虚に身を賤して態も賤し 同 II 友達の宿所に 我が所によび入 同 II 同 II 同 II みすれば弥あだと成べし 同 II 同 II とがをふなり 兼好法師がいへるごとく 同 II 同 II あるべきごとくに。	すぐれたる事の見事なるは、 同 II 脇ざしといふ物をさす 同 II 物詣旅行などは 同 II かなぐりすてにぐる 同 II 無等閑人のとぶらひ 無隔心様に見て 虚に身を賤して態も賤し 同 II 友達の宿所に 我が所によび入 同 II 同 II 同 II みすれば弥あだと成べし 同 II 同 II とがをふなり 兼好法師がいへるごとく 同 II 同 II あるべきごとくに。	すぐれたる事の見事なるは、 同 II 脇ざしといふ物をさす 同 II 物詣旅行などは 同 II かなぐりすてにぐる 同 II 無等閑人のとぶらひ 無隔心様に見て 虚に身を賤して態も賤し 同 II 友達の宿所に 我が所によび入 同 II 同 II 同 II みすれば弥あだと成べし 同 II 同 II とがをふなり 兼好法師がいへるごとく 同 II 同 II あるべきごとくに。	すぐれたる事の見事なるは、 同 II 脇ざしといふ物をさす 同 II 物詣旅行などは 同 II かなぐりすてにぐる 同 II 無等閑人のとぶらひ 無隔心様に見て 虚に身を賤して態も賤し 同 II 友達の宿所に 我が所によび入 同 II 同 II 同 II みすれば弥あだと成べし 同 II 同 II とがをふなり 兼好法師がいへるごとく 同 II 同 II あるべきごとくに。

29	30	33 31	35 34	36	37	38
侍の太方 ×× するこもを 過分なるゑさん ^{××} の物。 其姓賤しくも。 牛の有けるをみて過ければ。 法界の一理を心に 若きものにふあふ様に。 毎月十二日和歌の会。 揚弓などすへし心劣に 因果の理によりて主従と 足杯あらはする事 ×× 様か手柄にて。 聖明負薪郎広之語言。 相当に増るほどの 治中にて ×× 家信にてあるべからず。 感應月浮影 ×× 信力□へて。 浅増や 命をつめ給へ。 速に上着すべき也。 無器用也。 おもひおる事共。 ことゝいましめのためならば 他人の一覧におかふ事	侍の太方 ×× すがごも 同Ⅰ 其姓賤しきも、 同Ⅰ 唯法界の一理を心に 若きものにあふ様に 同Ⅰ 揚弓などさへ心劣に 同Ⅰ 足などあらはする事 同Ⅰ 我が手柄にて 聖明應、負薪之言、廊廡之語、 相当に贈るほどの 國中にて 同Ⅰ 感應月浮影 ×× 信力たへて 同Ⅰ 速に上表すべき也 無念なり、 おもひ出る事ども もといましめなれば、 他人の一覧におよぶ事	同Ⅱ 過分なるじまん ^{○○} の物 其姓賤しくとも 牛のありけるを見て黒ければ 同Ⅱ 毎月二日和歌の会 同Ⅱ 因果の理により主従と 同Ⅱ 我が手柄に而 聖明負薪 即広之語言 相当に備るほどの 洛中にて 不信にてあるべからず 同Ⅱ 信力こたへて 浅増也 命をつづめ給へ 同Ⅱ 無念也 同Ⅱ 同Ⅱ 同Ⅱ 同Ⅱ				